

ニホンウナギ

Anguilla japonica Temminck & Schlegel, 1846

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1999	2007
—	—	DD

水産有用魚で、シラスウナギ、成魚ともに漁獲量が近年50年間継続的に減少を続けている。漁獲量から推測して、日本の河川に遡上する本種の個体数が減少していると考えられる。河口域で遡上したシラスウナギを捕獲することや遡上を妨げる堰の建設や隠れ場所の減少が本種の減少の一因と考えられる。卵からの養殖は実用化されていない。

Anguilla japonica has a highly commercial value in Japan, but the catch of both adult and glass eels in number has decreased continuously since the 1970s. From the fishery data, the population that enters into the Japanese rivers is estimated to have seriously decreased. The cause of the decrease of the eel catch is assumed to be the overcapture of glass eels that crowd together into the mouths of rivers, weirs that prevent young eel from moving up the stream, and the diminishing of refuges. The aquaculture technology of eels on a commercial basis has not been completed yet.

基礎情報

■**形態** 体は細長く、背部は暗色、腹部は白色である。体に斑紋はない。下顎は上顎よりわずかに突出する。皮下に埋没した小鱗がある。背鰭、尾鰭、臀鰭は連続する。全長100cmに達する。背鰭基部は胸鰭後端と肛門の中間かそれより後方にある点でオオウナギと区別できる。脊椎骨数112～119。胸鰭鰭条数15～20。

■**分布域** 北海道中部以南の日本各地、朝鮮半島南部と西部、台湾、中国、ベトナム、ルソン島などに分布。

■**生息環境** 河川の中下流域、湖沼、内湾の浅海域に生息する。河岸の石垣の間隙、土手の穴、石の下などに潜む。

■**生活史** マリアナ諸島西方海域で産卵、孵化後、海流に乗り回遊し、河口部に達した葉形幼生は、変態してシラスウナギとなる。河川を遡上して成長し、4～15年で成熟して産卵回遊する。近年、産卵場がほぼ特定され、日本の河川からの回遊個体が産卵に加入していることが明らかになった。マリアナ海溝の産卵場で捕獲された個体はすべて汽水履歴があることから、河川に遡上することが確かめられている。夜行性

で水生昆虫、小魚などを餌とする。

現在の生息状況

■**分布域の現況** 分布域そのものの減少は見られていない。

■**生息地の現況** 河口堰や堰の設置により本種の遡上が妨げられている。また、河川改修により本種が隠れる河岸の間隙や、浮き石の間隙、土手の穴などが減少した。河口堰の下流側で遡上個体の捕獲も行われている。

■**個体数の現況** 漁獲統計によれば、1965年代には2,500tを超えていた漁獲量が、2010年には500t以下に減少している。シラスウナギの採捕量も1960年代には200tを超えていたが、2010年には10tに満たないほど減少している。正確な資源量は不明であるが、漁獲量は1970年代から継続的に減少しており、個体数が減少傾向にあることがうかがえる。天然ウナギの漁獲量やシラス採捕量に関する聞き取りによっても減少していることがうかがえる。

存続を脅かす要因

気候変動や海流の変化なども本種の日本海域への加入を減少させている一因として考えられるが(71)、河口堰の建設(25)によって遡上

が容易でなくなった河川が増加しており、健全な生活史が保障できない状況である。また、遡上のために河口部に集まったシラスウナギを堰の下流側で採捕する(41)こと、河川改修(13)により河岸の穴や河床の浮き石などがなくなり、隠れ場所が減少したことが個体数の減少に拍車をかけていると考えられる。

保護対策の現状

シラスウナギの採捕数や遡上期間を考慮して採捕期間を制限したり、産卵場に向かう下りウナギの捕獲を制限している県もある。また養殖した成魚を放流しているが、効果は確認されていない。

特記事項

水産的に経済価値の高い魚種で、シラスウナ

ギを採捕して養殖を行っている。人工授精から得た卵を養殖する技術はまだ実用の段階に至っていない。IUCNのレッドリストで絶滅危惧IBに選定されている。

参考文献

- Han, Y. S., C. L. Hung, Y. F. Liao and W. N. Tzeng, 2010. Population genetic structure of the Japanese eel *Anguilla japonica*: panmixia at spatial and temporal scales. *Marine Ecology-Progress Series*, 40: 221-232.
- 日本水産資源保護協会, 2003. 内水面資源増養殖・管理総合対策委託事業(ウナギ資源調査)報告書. 148pp.
- Tsukamoto, K., 1992. Discovery of spawning area for Japanese eel. *Nature*, 356: 789-791.
- Tsukamoto, K., S. Chow, T. Otake, H. Kurogi, N. Mochioka, M. J. Miller, J. Aoyama, S. Kimura, S. Watanabe, T. Yoshinaga, A. Shinoda, M. Kuroki, M. Oya, T. Watanabe, K. Hata, S. Ijiri, Y. Kazeto, K. Nomura and H. Tanaka, 2011. Oceanic spawning ecology of freshwater eels in the western North Pacific. *Nature Communications* 2, Article number: 179.

執筆者：小早川みどり